

建主の思いや職人たちの技術を現代に継承

日本の民家と屋根、そして

瓦の未来を考える

2018年 新春特別寄稿 民家再生に取り組む 建築家・藤岡龍介氏

新春号では、民家再生に力を注ぐ建築家、藤岡龍介氏の特別寄稿を連載でお届けする。題して「日本の民家と屋根、そして瓦の未来を考える」。



①堀内家住宅。松本へ移り、信州の民家「本棟造り」の建物を見て衝撃を受けた

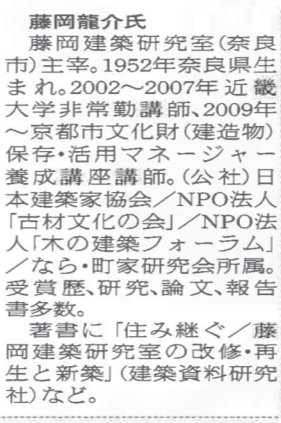


②東大阪の民家。築約150年の元組屋の再生

奈良に生まれ、育つ

興福寺の鐘の音で家路へ

■奈良に生まれ育って 私は奈良市に生まれ、育ちました。東大寺、興福寺、元興寺や春日大社など、世界遺産も存在する旧奈良町です。国宝、重要文化財などの建造物が数多くある町です。町家などの未指定文化財を入れれば、文化財の宝庫ともいえる町です。



■信州の民家 大学の建築史研究室を卒業後、東京で5年間、現代和風や現代数寄屋などの建築に携わり、都内や地方都市に建てられる住宅や料亭などの現場監督を行っていました。そこでは大きく捉えた構成美から、納まりまで、きめ細やかな配慮のなかで建築を造り上げていました。そこには熟練した技術が埋め込まれ、研ぎすまされた緊張感のある空間が創られていました。



③吹田の民家。150年前に岐阜地方から移築し大和棟に姿を変えた民家を再生

伝統建築を在来構法で 建物の魅力最大限に活かす

録されてきました。柱や天井板なども一カ所ではなく吉野や多武峰、宇陀、大阪、野など遠い数カ所の材木を扱っている所から購入してました。屋根瓦は、使われる場所ごとにさまざまな種類の瓦を一つ一つ指定してました。それぞれの項目には数量と値段が記入され、少し離れた七条村からも瓦は購入されてました。

■設計事務所を設立 こうして、奈良で独立し、初期の仕事の一つに東大阪の民家(写真②)がありましたが、150年を経た元組屋の主人から現代の住まいに改修を依頼されたという話でした。実は施工会社や設計者など何人も人々にその主屋の建物を相談したのでしたが、10人に聞けば10人も古いので解体して新しい建物で建て替えた方がいいと言われ思い悩んでいたのでした。当時の再生という言葉もあまり知られていない頃だったので、仕方ないこともありました。見れば十分再生に耐えうるしっかりとした造りで、民家としても魅力的なものでした。



④旧新川家住宅。泉佐野ふるさと町屋館として活用、この地方特有の本瓦の緋(しころ)葺き屋根。修復再生

瓦はメンテナンスが容易で優秀な材料

は、前述の本棟造りが街会堂や奈良俱樂部、郵便道筋に向かって妻を見せ、何軒も連なってダイナミックな並びみでした。その上、中山道の宿場町に見られる、切妻の2階建てで、元は板葺き石置屋根であったであろう、平入りのせがみ造りも建てられていました。2階が1階の外壁柱通りより前面にせり出すキャンティレバーとなる構造で、本棟造りの町並みの中に混在しているさまは、初めて見る町並みで、強く心に残っています。塩尻から東南に峠を越すと岡谷から諏訪に道は抜けて行きます。切妻造りで3階建ての生糸倉庫であった大型の土蔵が何棟も建ち、明治期の生糸の繁栄を表しています。諏訪では鉄石の産出により、民家ははじめて大きな棟飾りを持ち、正面の庇も同じものが喜ばれていました。